



# THE FRONTIER TIMES

【ザ・フロンティア・タイムズ】



## 〔輝く未来と国際教育〕

10年後の社会はどうなっているのだろう。そして、どのような環境で人々は生活をしているのだろう。誰もが一度は考えることだが、「未来の世界」を正確に予測することは困難である。「未来の世界」という言葉は、私たちに希望を感じさせる。ところが、「未来の世界」には不安定な要素が多く、誰もが完全に知りうることのできない領域なのである。

かつて20世紀だった頃、「21世紀」という言葉は輝かしい未来の象徴であった。希望に満ちあふれた世界がやってくると人々は大きな夢を膨らませていた。21世紀のはじめに2機の飛行機が背の高いビルに向かうまでは。あの時から人々は次第に疑い始めたのだ。待っていれば素敵な世界がやってくるなんて嘘なんじゃないかと。

コンピュータの父であるアラン・ケイは言った。「未来を予測する最良の方法は未来を創りだすことだ」と。新しい領域を切り拓いて新しい時代を築き上げる者たちは、自信を持ってそう語ってきた。彼らのアイディアが、世界をより素敵なものへと変えてきたことは間違いない。

さあ、これからどんな世界を未来に描こうか。伝統的なキーワードを紡ぎ合わせながらも、自由な発想で新しい価値を創りだす時期にもう来ている。未来を創りだす上で私たちが守るただ1つのルールがあるとすれば、それは次のようなストーリーから導きだされるだろう。

『ある哲学者が、地球は救命ボートのようなものだという説を主張し話題となった。彼は世界で不自由なく暮らしている人々の居場所は、ちょうど沈み行く船から脱出した救命ボートのようなものであると唱えた。海面には多くの生存者が浮かび、

救命ボートに乗ろうとあがいているが、残念ながらボートは満員である。ボートにしがみついてくる人々を追い払わなければボートはいずれ沈み、全員が死ぬことになるだろうと考えたのである。この比喩的表現は、世界の豊かな国の人々、すなわち地球上の選ばれたわずかな人々が過剰な消費のために生態系の最高のポジションを独占しているという事実を説明することを目的としていた。しかしながら、この説は基本的な点で間違っている。我々は地球という「宇宙船」に住んでいるのであって海洋を航海する客船に住んでいるのではない。宇宙船には救命ボートは存在しない。宇宙船の居住者はともに存続するか滅びゆくかのどちらかである。』(A Spaceship Has No Lifeboat(1990)※ より)

世界の人々と共存しながら、ともに持続的な成長を果たすための教育が本格的に始まろうとしている。本校が他に先駆けて実践している国際教育は、宇宙船地球号の搭乗員へ行われるものであり、今世紀の未来を担う者たちが受ける世界基準の教育である。

※People-Centered Development Forum(PCD Forum)会長 デヴィット・コーテン教授著



## Message from a Globalist

東北大学大学院理学研究科  
本校1983年度卒

教授 上田 実 氏

# 「フロンティアには誰もいない」

名

古屋商科大学付属高校(現名古屋国際高校)を卒業後に、理学部化学科に進みました。大学2年の時に、中西香爾コロンビア大学教授の生物現象を化学物質で解明するという講演に感銘を受け、生物有機化学の研究に進みました。

化学で生物の謎解きをする研究は、非常にエキサイティングです。私の研究は、植物の生理現象をコントロールする化学物質です。マメ科の植物のほとんどは、夜間、「眠る」ように葉を閉じます。ダーウィン以来多くの科学者がこの現象を研究してきました。私たちは、植物体内の簡単な有機化学反応が、生物固有のリズム(体内時計)に従って起こることで、夜に葉が閉じることを発見しました。生物現象を分子の変化で説明できた時、自然の仕組みの美しさに感動します。

フロンティアスピリットという言葉は耳に馴染んでいるかもしれませんが、真的フロンティアは、皆さんがイメージするものとはほど遠い地味なものです。そこで、研究に必要な装置も市販されていない

ので、自分で作り上げた見た目の悪い装置が頼りです。また、本や論文を読んでも、必要な情報はどこにもありません。フロンティアには誰もいないのですから、当たり前ですよ。たとえ周り全員がNoと言っても、正しいものは正しいのですが、結論が出るまでは、誰にも正否の判断は出来ません。この孤独がフロンティアであり、そこで頼りになるのは、自分の経験と自信だけです。

何かに真剣に打ち込んで、自信を持つこと。このことは全てに共通するのではないかと思います。深刻に考え過ぎても凹むだけです。自分を信じて、思いつくまま、元気に手を動かすうちになんとかなるだろう、というスタンスが何事にも大事です。一生懸命に生きてください。✚

### Profile

上田実 Minoru UEDA

昭和40年10月 名古屋生まれ  
名古屋大学大学院農学研究科博士(後期)課程修了博士(農学)取得後、慶應義塾大学助教授を経て、東北大学大学院理学研究科教授に就任。農林水産省バイオテクノロジー先端技術シース培養研究主任研究員を併任するなど生物有機化学の研究分野で活躍。



**第4回フロンティアカップ  
英語スピーチコンテスト**

**8.29**mon

**[時間] 9:30～12:30**

**名古屋国際** 中学校  
高等学校

NAGOYA INTERNATIONAL JUNIOR & SENIOR HIGH SCHOOL

Pick up the

# Feature

6月25日に開催された国際理解講演会は、アフリカ諸国の自立支援活動を行っている特別非営利活動法人「ミレニアム・プロミス・ジャパン」の鈴木りえこ理事長をお招きし、貧困地域の生活の様子や支援活動の内容について、実際の体験をもとにお話をいただきました。講演会の後の座談会では、より具体的な質問を投げかけるなど生徒も関心を持って耳を傾け、現在、世界で起こっている社会問題を知る貴重な場となりました。

## アフリカの貧困を 体験談から学んだ 国際理解講演会

国連が掲げる「ミレニアム開発目標」にもとづき、世界中の貧困をなくし、貧しい地域の子どもたちにも教育の機会を与えるための支援活動を行っている「ミレニアム・プロミス・ジャパン(以下MPJ)」のMPJの鈴木りえこ理事長を迎えて開催した国際理解講演会では、世界で実際に起きている貧困の現実について話を聞くことができました。日本の約80倍の面積に、9億6千万人以上が暮ら

しているアフリカの貧困問題を、資料や写真を使って具体的に教えてくださった鈴木さん。なかでもサハラ砂漠以南の特に貧しい地域では、平均所得が日本の42分の1しかなく、1日1ドル(約80円)未満で生活をする人がいることや、約50%の子どものしか小学校を卒業できないこと(中学校は約25%)など、今までに知らなかった厳しい現実に触れ、国際生は強い印象を受けた様子でした。

## 「恵まれた環境に感謝し、 困っている人々を助けられる人に」

### 「現地に行くことで気づくこと、感じられることがある」

「MPJ」ユース部のメンバーとして、昨年、ルワンダを訪れた大学生からは、学校や病院、灌漑施設、道路を作って総合的に生活を改善する「ミレニウム・ビレッジ・プロジェクト」という支援についても話を聞き、作物の収穫が3倍に増えたり、小・中学校で熱心に勉強する子どもたちが増えつつあるなど、確実に成果が現れていることも教わりました。インターネットやテレビから得た情報と、現地で感じたことには大きなギャップがあったという彼らの、「自分

の中の“当たり前”を、あえて疑ってみることも大事」という体験談も強く心に響きました。

「世界には貧しく教育を受けられない子どもがたくさんいます。名古屋国際のように素晴らしい環境で勉強できる皆さんは、本当に恵まれています。そのことに感謝して一生懸命に勉強し、1人でも多くの人が『世の中のために何か活動をしたい』と思ってくだされば嬉しいです」と、鈴木さんは最後に、温かいメッセージを贈ってくださいました。🌻



▲ とても興味深い内容で、約1時間30分の講演はあっという間に過ぎました。



## 『自立』を促すような支援の方法が大切と感じました」

**MPJ鈴木理事長**：今日の講演を聞いて、どんな感想を持ちましたか？

**永井一輝君**：アフリカの貧困問題については、本で読んだりテレビから伝えられた知識はありましたが、やはり現地に行かれた方の体験談は重みが違うと感じました。個人的には、携帯電話の普及率が30%以上だというデータに驚きました。

**水谷沙貴さん**：私はアフリカについて、マイナスなイメージばかり思い浮かべていましたが、今回のお話のなかで「現地の人たちは貧しくても明るく生活している」と聞いて驚きました。と同時に、困難な状況でも明るく生きる姿勢に感動しました。

**MPJ鈴木理事長**：今日皆さんにお話しした「貧困」は深刻な問題としていまだ存在していますが、現在のアフリカの経済成長率は平均5～6%を維持していて、石油や天然ガスなど自然資源も豊

富なので、10年後、20年後には大きく発展している可能性があります。マイナス面だけではなく、アフリカにはそうしたプラス面の要素があることは、あまり知られていないかもしれませんね。

**永井一輝君**：以前、アフリカに行った経験のある先生から、アフリカには現在も「女子割礼」などの風習が残っていると聞いたことがあります。実際に現地ではどう考えられているのですか？

**MPJ鈴木理事長**：確かに今もそうした習慣が残っていて、国連では衛生上の問題や男女差別の観点から廃止させようとして取り組んでいます。ただ、こうした問題はその国の文化や歴史が深く関わってくるので、一方的に「止めるように」とは言えない部分もあります。例えば、ミレニアム・ベレッジにクリニックを作り、病気になった人に『この薬を飲めば良くなる』と言っても拒否する人がいるんですよ。それは、この症状の時はこの



▲ 感想や疑問に感じたことなど、話題が尽きなかった講演会後の座談会。

草を煎じて飲む、という伝統や風習があるから。情報が足りず、十分な教育も受けていないので、それが正しいと信じている人もいます。私たちが当然と思っていることが、現地では当然ではないことも多いのです。難しい問題ですが、時間をかけて話し合い、変えていかなければならないと思っています。

**水谷沙貴さん**：講演の内容で一番気になったのは環境問題のことでした。電気が使えない貧しい地域では、木を切って薪を燃やして食事を作っているということでしたが、一方で森林伐採は環境を破壊するとも言われてしまう。「いったい、どうすればいいの？」って思いました。



▲水谷沙貴さん 4年生(高校1年)

**MPJ鈴木理事長**：森を切ってはいけな  
いと言っても、彼らは他に手段がなく、  
食べるために木を切らなくてはいいな  
い。貧しさも改善しなければならな  
いし、環境も保護しなければいけない、と  
いう本当に難しい問題なので、国際問  
題としてみんなで総合的に考えなけれ  
ばいけません。ただ、あなたのように関  
心を持ってくださることが、すべての始  
まりなのです。

**永井一輝君**：僕はお金を持っている側  
が「援助」として一方的に押しつけるよ



▲永井一輝君 5年生(高校2年)

りは、現地の人が自分たちで考えられる  
ような「自立を促す支援」が大切だなと  
思いました。

**MPJ鈴木理事長**：あなたが気づいてく  
れたのはとても重要なことだと思いま  
す。これまでのように困ったらお金を与  
えるだけの支援ではなく、地元の人と同  
じ目線で考え、彼らが何を望んでいて、  
何が必要なのかを一緒に解決していこ  
うというやり方。それが私たちが取り組  
んでいる支援活動なのです。そのため  
には、あなた方のような若い方の力が必  
要ですから、期待していますよ。👏



Profile

### 鈴木えりこ

NPO法バミレニアム・プロミス・ジャパン」理事長。  
ロンドン大学大学院修了。

### ミレニアム・プロミス・ジャパンとは

国連が設定したミレニアム開発目標の達成に向  
け、貧困の削除、マラリア対策、生活水準と教育の  
向上につながる、さまざまなアフリカ支援事業を  
行っているNPO法人。アフリカ10ヶ国・約80村  
で、現地住民の自立を促す包括的援助「ミレニア  
ム・ビレッジ・プロジェクト」では、現在約40万人の  
住民がその恩恵を受けている。



## INFORMATION

2011学校基本計画  
進行中!

4

月1日に本校で配付された2011年度学校基本計画(STS)の主な計画が着々と進行しています。現在活動している学習指導と管理運営に関する具体的な方策を紹介します。✿

## 学習指導関係

- ・総合的な学習の時間にボランティア活動(清掃活動やリサイクル活動など)や社会体験活動(職場体験活動など)を導入し、従来の国際理解に関する内容とあわせて充実を図ります。
- ・主として国語・数学・英語に関する基礎的教養科目の増設をします。
- ・意欲的な生徒がTOEIC®600点以上もしくは、TOEFL iBT85点以上、獲得できるように行動します。
- ・教員の力量向上を図るために1学期と2学期に授業研究や研修会を行います。日々の授業で、教員同士が授業を見合い、専門的な能力の向上を図ります。

## 管理運営関係

- ・危機管理体制のマニュアルを作成し、非常時の対応を迅速に行うようにします。さらに、従来の生徒と職員の防災訓練の他に、新たに職員だけの防災訓練を実施し、危機管理体制の充実を図ります。

陸上ホッケー部男子  
2年連続インターハイ出場!!

陸

上ホッケー部が愛知県高等学校総合体育大会で優勝し、8月3日から岩手県で開催されるインターハイ(全国高等学校総合体育大会)に2年連続での出場が決定しました!6月の東海大会でも静岡県代表を破り2位になり、昨年以上の成績が期待できます。インターハイは、愛知県代表・東海地区代表として参加します。選手の中には、名門と呼ばれる大学で陸上ホッケーを続け、日本代表を目指して努力を続けていく国際生もいます。あらゆる「代表」として選ばれる数少ないチャンスを得て、その栄誉に自信を持ち、貴重な経験を積んでいくことを望んでいます。(顧問:黒宮先生)✿

## MOVIES

## [ Sunset Boulevard (1954) ]

"I am big. It's the pictures that got small."

私は大物よ。小さくなったのは映画のほうだわ。

映画『サンセット大通り』は、ノーマ・デスモンド(グロリア・スワンソン)という世間から忘れられたサイレント映画女優の空想の世界に引き寄せられたジョー・ギリス(ウィリアム・ホールデン)という売れない映画作家が主役の物語です。

バスター・キートンやヘッダ・ホッパーなどの往年の映画スターが数多く登場することでも有名です。グロリア・スワンソンはサイレント映画時代の名高い女優の1人でもあり、彼女の経歴の中で最も輝かしい1925年には、10,000通以上ものファンレターが毎週のように届いたと言われています。しかしこの頃、映画の中のノーマと同様に、スワンソンは過渡期を迎えた映画界から取り残され、サンセット大通りの豪邸に住んでいました。1920年代を代表する映画監督エリッヒ・フォン・シュトロハイムもまた輝かしい時代のスワンソン主演の監督でしたが、この映画の中ではスワンソンの執事を演じています。

ラストシーンは印象的で、ジョーを殺害するノーマがカメラの前に立ち、「デミル監督、私をアップにして」と言うのです。この瞬間彼女はカメラの中に大きく映り、そして光の中に消えていきます。この映画はアカデミー賞3冠を達成し、アメリカ国立フィルム登録簿に記録されています。🎬

Sunset Boulevard (1950) is an American film noir that was written and directed by Billy Wilder. The film features an unsuccessful screenwriter named Joseph Gillis (William Holden) who is drawn into the fantasy world of a faded silent movie star named Norma Desmond (Gloria Swanson). Gloria Swanson was, in fact, one of the most celebrated actresses of the silent era. At the peak of her career, in 1925, she received over ten thousand fan letters every week. When someone says that Norma Desmond used to "big", she utters the famous lines above. In the final scene, Norma, having killed Gillis, faces a battery of cameras. She behaves as if she is on a movie set. She says: "All right, Mr. DeMille, I'm ready for my close-up." She then appears to reach into the camera and to dissolve into the light. Sunset Boulevard won three Academy Awards and has been placed in the National Film Registry. 🎬



## Good Days in Nelson

**Eito NAKAYA**

Student in the Integrated Six-Year Program

I spent two months in Nelson, New Zealand. I lived with a kind family there and attended Nelson College, which has become our sister school. I passed many good days there.

One time, I went on a boat to fish. To my amazement, I caught a big shark! Another time, I went kayaking and my camera was accidentally dropped into the ocean. Kayaking is really hard work. Still, it was a lot of fun going to different islands and looking at the sea lions. There were lots of them.

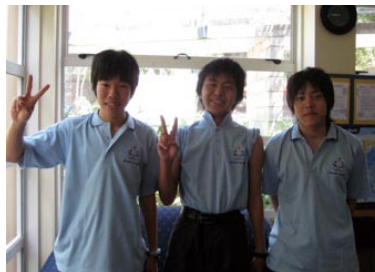
On many days, I played tennis and cricket and once went to watch New Zealand play Australia in rugby. The game was supposed to be in Christchurch, but because of the earthquake, they decided to play at the stadium in Nelson, so I got to see the game.

I really liked the chips in New Zealand. I often went to the chips

shop for snacks. The bags of chips are large but very cheap. Also, I really enjoyed having BBQs on the beach.

Classes at Nelson were challenging. In social studies, we learned about segregation. I had a lot of homework. The Nelson boys wear uniforms, but once in a while there is something called “mufti day”. On mufti day you can wear what you want. I love mufti day. During P.E. class, we often played touch rugby.

All in all, I had a great time in New Zealand. The people there were always very kind to me. They really made me feel right at home.





# Private Memories of New Zealand

**Junya KUNO**

Student in the Integrated Six-Year Program

I went to New Zealand to live with a local family and to study at our sister school—Nelson College—for over two months. What I remember are small and delightful things. For example, my homestay family's dog, Boston, ate my homestay brother's birthday cake. That was pretty funny. We had to go out and buy a new cake! Once, I woke up in my room and found a mouse staring at me. It was furry and spherical. I thought it was very cute.



The two months were very eventful. Our plane was late because a volcano erupted in Kyushu. Once I was in New Zealand, a terrible earthquake hit Christchurch. We could feel it in Nelson. Also, the earthquake and tsunami that devastated northeast Japan happened while I was away.

Mainly, I remember playing cards with my friends, skimming starfish

on the water at the beach, making Japanese pancakes, swimming, playing tennis, watching movies, getting my rugby ball autographed by Dan Carter, buying souvenirs, going fishing, playing touch football at school, eating venison and enjoying barbecues.

One morning, I hiked with three friends to the top of a hill. We ate lunch at the top. The view was great. Later, the same day, we went to a gorgeous restaurant. I ordered steak. It was delicious, expensive and very big. On the way back home, I bought souvenirs.

The time went by very quickly. I am very grateful for the chance to spend time with the wonderful people in Nelson. In the end, I didn't want to come back to Japan! It was a great experience that I will always keep in my heart.





# Two Months of Bliss at Nelson College

**Atsushi YOSHIDA**

Student in the Integrated Six-Year Program

I spent two wonderful months recently at our sister school, Nelson College in New Zealand. I lived with a local family, attended the school and had a great time.

I went to an international dance and got my face painted. I went kayaking with my friends and saw a bunch of sea lions. I cooked Japanese food for my host family. I played drums often and had a great drum teacher. I became a big fan of the Crusaders rugby team.



When I was in New Zealand, there was a horrible earthquake in Christchurch. Many buildings collapsed and hundreds of people were killed.

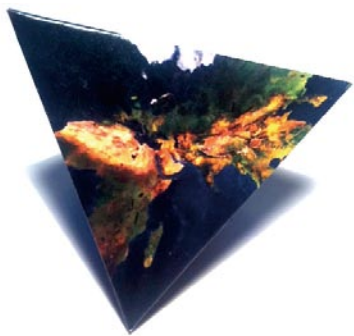


Every day, I got up at about six in the morning and took a bus to our school. I studied English and Japanese every day, swam at the beach, played rugby in P.E. class, learned the Nelson College school song, played cards with my friends, went to town with my Japanese friends to buy clothes and DVDs, cleaned my room and got to know my host family better.

The one thing I noticed is that the longer I stayed in New Zealand, the less I wanted to go back to Japan. There were certainly many challenges, but at the end of the day, I wanted to stay with my new friends there.



# GLOBAL VISION



## Our Fragile Oceans

Oceans cover seventy percent of our planet. They feed and protect us. However, they are in dire straits. If we do not act now to save our oceans, we will rob future generations of a resource vital to their survival.

Humans have polluted the oceans terribly. Many large fish have mercury levels so high that humans cannot safely eat them. The mercury comes from factories that burn coal. Rivers also carry pollutants into the oceans. Most of the “dead zones” in the world’s oceans are at the bases of rivers. Some of these zones are thousands of kilometers across. There is so little oxygen in these zones that almost no fish can live there.

In addition, humans are catching

too many fish. Because of pollution and overfishing, fish stocks in the oceans have been seriously depleted. Many fish species are now endangered. These include most species of whales, sharks, haddock and cod.

Coral reefs are also disappearing, as ocean waters are getting warmer and cannot sustain them. Perhaps half of all reefs will disappear in the near future.

Beset by dead zones, overfishing and changing climate, our oceans are at a critical “tipping point”. We have to intervene meaningfully in order to restore our oceans to health. We don’t have much time.

発行 **名古屋国際** 中学校  
高等学校  
NAGOYA INTERNATIONAL JUNIOR & SENIOR HIGH SCHOOL

所在地 〒466-0841 名古屋市昭和区広路本町 1-16  
発行月 年間4回 (6月/9月/12月/3月)

制作 学校法人栗本学園  
名古屋国際中学校・高等学校  
学内広報チーム  
デザイン cluch on cluch Co.,Ltd.  
企画協力 株式会社 イーブレイン

広報紙「THE FRONTIER TIMES」に関するご意見・ご感想は [frontiertimes@nihs.ed.jp](mailto:frontiertimes@nihs.ed.jp) まで。  
広報紙「THE FRONTIER TIMES」に掲載されている記事、画像など全てのコンテンツの著作権は  
名古屋国際中学校・高等学校に帰属します。私的使用以外の目的で複写・複製することはできません。